

かざ

ぐるま

風車

紀州の歴史と文化の風

文化財センター季刊情報誌【かざぐるま】

2021 秋号

96

公益財団法人 和歌山県文化財センター



特集

木ノ本八幡神社本殿の保存修理工事



特集 木ノ本八幡神社本殿の保存修理工事

一、はじめに

木ノ本八幡神社は、和歌山市の西北部に位置し、和泉山脈のほぼ西端部にある巖櫃山いわかしのやまの中腹に所在します。地域の皆様には「木ノ本八幡宮」の呼び名のほうが、知られているでしょう。

当社の創祀にかかる記録は不明ですが、社蔵文書に建徳二年（1371）以降の寄進状が15通あり、中世には既に当地方の産土神うぶすながみとして広く信仰を集めていたことがうかがわれます。社記によると文明四年（1472）造営の本殿が、天正十三年（1585）の兵火により、宝物類とともに焼失し、その後の慶長八年（1603）に仮本殿を建て、元和四年（1618）に現在の本殿を再建しています。

この建物は、その後寛文九年（1669）、寛政四年（1792）、文政四年（1821）、弘化三年（1846）、明治十九年（1886）、明治三十九年（1906）、昭和二十六年（1951）などに檜皮屋根の葺替を行っており、墨書かえるまた（本殿の葺替や脇障子彫刻に元和

五年の記述）や社記と考え併せると、元和四年から元和五年（1619）に造営されたと推定され、建物の形式、技法もその年代の特徴と一致します。建築年代が明らかでない点で、県下の建築史編年の基準事例として重要であると認められ、昭和四九年に和歌山県指定文化財となりました。指定後の修理では、昭和五十年、平成九年度に屋根葺替工事を行い、平成二三年度に建物の傾斜補正と木部の部分修理を行っています。

今回の事業では、令和二年度から三年度までの二ヶ年度で本殿の屋根葺替と部分修理を実施しています。令和二年度は仮設工事と木・建具工事を行い、主に内外障境で過去の蟻害により、納まりに不具合が生じている木部の修理と床下根太の添木による補強、格子戸の補修を施工しました。造作材においては桧木や埋木補修を施し、床組については解体せずに補修を行う方針である為、根太に添木による補強を行い、今後も荷重に耐えうるように対処しました。

屋根の檜皮葺は前回の葺き替えから二十年以上経過し、平葺の摩耗が進んだ部分で小

動物が穴をあけ、軒付の腐朽も進行していました。平葺は全面を葺き替え、軒付は腐朽していた部分を積み替えました。

屋根葺替が完了した後、箱棟木部の破損箇所の補修と箔押し補修を行った飾り金具の取り付けを行いました。



屋根の修理前破損状況（写真1）



軒付積み替え作業状況（写真2）

二、本殿について

本殿は切妻屋根の平入りで、正面に柱が四本建てられ、向拝という庇が取り付く三間社流造という形式で、屋根を檜皮で葺いています。修理の記録が残っている小屋組と軒まわり、浜縁以外は、当初の部材をよく残しており、建立後には解体修理が実施されていないものと見受けられます。

全体的に彫刻や木鼻きばななどの形が良く整い、精緻な技術が目を引き、葺替は紀州北部において室町時代から展開した建築装飾における江戸初期の特徴を良く現しています。



向拜の手挟 (写真3)



向拜木鼻の龍 (写真4)

正面の向拜柱上の垂木勾配に沿った部分に配されている手挟(写真3)という部材には、外側から内部にかけて立体的に彫刻を仕上げた、籠彫りと呼ばれる高度な技法が施され、向拜の木鼻の龍(写真4)の表情にも躍動感があふれます。

また、側面の大瓶束上の妻飾り(写真5)には整った木鼻が付き、彩色で塗り分けられています。一方で正面の組物まわり(写真6)では、塗装の痕跡が確認できるものの、剥落が著しい状態でした。

幕股のなど彫刻は細部まで塗装が失われ、素木のようになっていますが、同様の状況が近隣の加太春日神社本殿や年代の近い藤白神社本殿においても確認され、ある時期、意図的に掻き落とされたのかもしれない。

その時に手の届く範囲は入念に塗装を剥



大瓶束上の妻飾り (写真5)



東妻面の塗装痕跡残存状況 (写真7)



組物まわりの彩色痕跡 (写真6)



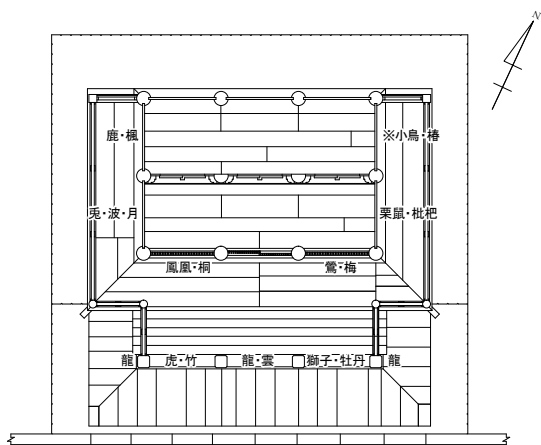
正面長押裏の絵様痕跡残存状況 (写真8)

がしたともみられ、見え隠れになる長押上部から軒まわりまで、表面に塗装痕跡が所々に残っており塗装範囲を特定出来そうですが、縁周辺については部材の取り合いに、薄く痕跡を確認可能な程度でした。顔料は赤色と白色、緑色、黒色が散見されます。また、文様は組物に連珠付き条带文が確認でき、正面の

柱の長押裏には絵様の痕跡が認められました(写真7、8)。このように、本殿が鮮やかな極彩色で塗られていたことについては間違いないようですが、明治期から昭和初期に造営された神社の多くが素木で建てられていることと塗装が落とされた理由は共通しているかもしれません。

三、建築彫刻の主題と配置

彫刻は、この本殿の大きな特徴のひとつです。しかし、拜殿から石階段を上った位置にあることから、普段は間近に見ることのない為、修理事業にともない撮影した記録写真で彫刻の主題について紹介いたします。まず、本殿の各部材に施された彫刻主題の配



彫刻主題の配置 (図1)



兎・波・月



鳳凰・桐



獅子・牡丹



鹿・楓



鶯・梅



龍・雲



栗鼠・枇杷



小鳥（※不確定ため参考）・桐
墓股彫刻の主題一覧（写真9）



虎・竹

置を平面図上に示すと（図1）の通りとなります。また、向拝水引虹梁（こうりょう）には「渦文・若葉」が彫られています（表紙写真）、真円に近い渦が細く優雅に彫られ、簡素な若葉が添えられている点に時代の特徴が表われています。

墓股内の彫刻は、虎の縞模様や龍の胴体などに彩色されていた痕跡もうっすらと確認できました。墓股内の彫刻は色が分かりにくく



鷹と松



諫鼓鳥

脇障子彫刻の主題（写真10）

なっていますが、見た目と主題の組み合わせの類例を基に整理しました（図1）（写真9）。

手挟の籠彫りは、東側が富貴を意味する「牡丹」で、西側が吉祥を意味する「菊」をモチーフにしています。脇障子では、東側は中国故事の、平和な世の中と民衆の平安を象徴した「諫鼓鳥（かんこどり）」を主題とし（風車45号コラム参照）、西側は武門の力を象徴する「鷹と松」を彫刻しています（写真10）。この手挟や脇障子の主題の組み合わせは、近辺の社殿にも使われており、当時の人々にとっては普遍的なテーマだったのかもしれませんが。

続いて本殿の彫刻の特徴をご紹介します。古くために、大工彫刻の変遷を紹介します。古代の建物では、太い柱列や深い軒を支える組物などの組み合わせにより建物全体がひとつの彫塑のように表現されましたが、鎌倉時代になると次第に細部が装飾されていくようになってきます。その一つに柱間で桁などを支える墓股があり、股の間に彫刻が施されるようになります。初期の彫刻は唐草など左右対称の幾何学的で平面的な紋様状で、全国に残る建物で特徴は共通します。

次第に左右対称が崩れ、彫刻も肉厚なものへと変化していき、室町時代になると具象的なモチーフが現れだし、県内では寛正三年（1462）建立の瀬湖八幡宮本殿（紀の川市）に鹿と楓が認められます。



丹生官省符神社第三殿の墓股（写真11）



加太春日神社本殿の墓股（写真12）

この彫刻は比較的素朴なものでしたが、永正十四年（1517）の丹生官省符神社本殿（写真11）においては、格段に彫刻の精度が上がり、立体感も出てきます。

桃山時代に入るとさらに迫力が増し、慶長元年（1596）の加太春日神社本殿（和歌山市）では額縁に見立てていた股から彫刻が溢れ出しています（写真12）。

一方で、江戸時代初期である元和5年（1619）においては、彫刻はさらに洗練されていながらも、再び額縁の内側に整然と納まるようになります。

この特徴は、和歌山市和歌浦で並び立つ天満神社本殿・慶長四年と東照宮拝殿・石の間・本殿・元和四年でも同様です。東照宮で

は墓股と組物の間の板壁部分も彫刻で埋め尽くされますが、個々の彫刻が枠を超えることはありません。さらに時代が下る徳川家霊台・寛永二十年（1643）では『彫師』との墨書が確認されており、この時点で既に彫刻は大工が建物の一部として作るのではなく、別に拵えたものをはめ込む物となっていたようです。

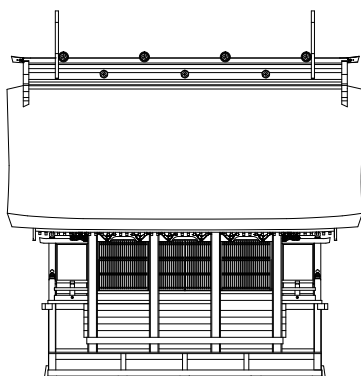
改めて木ノ本八幡神社本殿を見ると、彫刻は枠に納まるものの躍動感があり、木太く重厚な柱や組物との均整のとれた納まりに、桃山時代の大工彫刻のなごりを感じ取ることができます。

四、おわりに

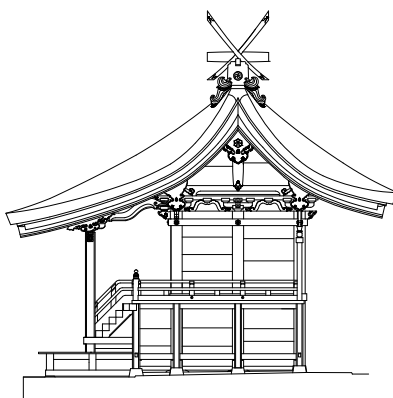
木ノ本八幡神社本殿は住宅地の奥まった位置にひっそりと佇み、周囲には穏やかな空気が漂っています。

本殿は建物の保護の為、囲われているので、今回ご紹介した彫刻類や塗装痕跡を間近に御覧いただくのは難しいとは思いますが、是非、お参りいただき、修理によって檜皮葺きを完了した屋根とともに、境内の雰囲気を楽しむいただければと思います。

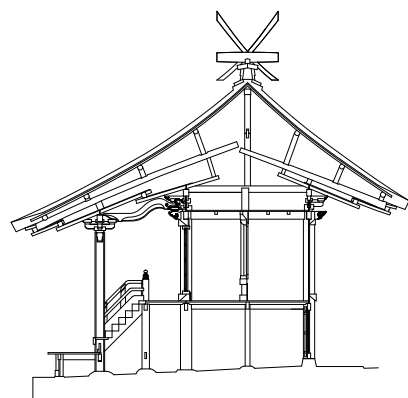
（大給友樹）



764	1,164	1,164	1,164	764
3,492				



764	1,630	764	1,163	1,163
2,326				



764	1,630	765	1,163	1,163
2,326				

木ノ本八幡神社本殿 正面図・側面図・梁間断面図（図2）



吉原遺跡周辺の自然災害

令和2年度に、日高郡美浜町所在の吉原遺跡の発掘調査を実施しました(図1)。調査地は日高平野の太平洋に面した海岸砂丘上にある、煙樹ヶ浜海岸内の保安林の一面です(写真1)。

元和5年(1619年)、紀州徳川家初代・徳川頼宣により植林が行われて以降、地元民の努力によって煙樹ヶ浜海岸の松林は守られてきました。

表土は松などの防風林による腐植土層で、その下層、黄褐色細砂は弥生時代中期から中世、近世以降の遺物包含層でした。その遺物包含層

の下層で、弥生時代から古墳時代の溝や土器の納められた土坑などの遺構(生活痕跡)を確認しました。(詳



図1 美浜町周辺 遺跡地図

しくは2021年刊行の発掘調査報告書をご参照ください。

発掘調査の終了後、さらには下層にヒトの生活痕跡がないか、調査範囲の一部



写真1 太平洋と煙樹ヶ浜海岸

を1mほど掘り下げてみると、時期は不明ですが、津波の痕跡を発見しました(写真2)。直径1~5cmの丸みのある石を多く含む、厚さ25~30cmの堆積層から、弥生時代よりも古い時期に、この周辺で津波の被害があったことがわかりました。

今回の調査地近くの、美浜町中央公民館浜ノ瀬分館の敷地内には安政南海地震(1854年)にまつわる石碑「美浜の津浪之記事碑」(花崗岩質岩製)が立っています。これは、安政南海地震によって津波の被害を受けた人物、藤井村の瀬戸佐一郎(現在の御坊市藤田町藤井)により建立さ

れたもので、大地震の時は、小高い場所に避難して、船で逃げようとしてはいけないと説いています。

今回の発掘調査成果や過去の文献資料などで、幾度も津波の被害にあったことがわかりました。過去に起こった災害が、将来に起こり得るということを改めて考えさせられた調査でした。(田之上裕子)

参考文献

和歌山県立博物館編(2015)『先人が残してくれた「災害の記憶」を未来に伝えるI—命と文化財とを守るために—』ほか

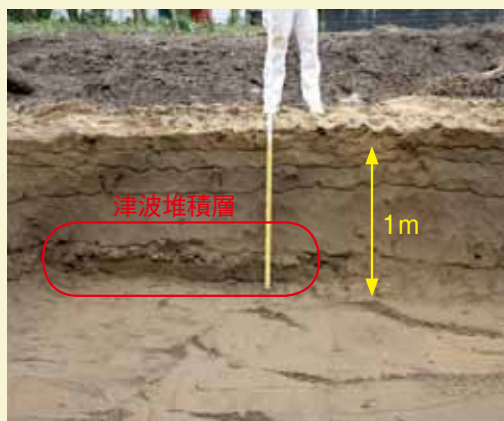


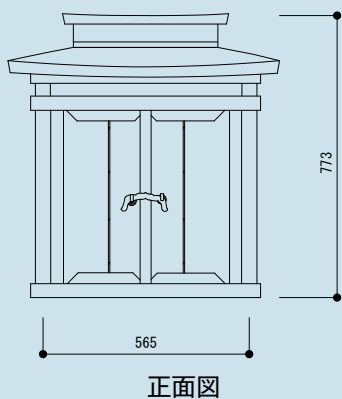
写真2 令和2年度調査で発見した津波堆積層

文化財建造物課 細部を見つめる 木ノ本八幡神社の宮殿

木ノ本八幡神社の本殿には御神体をまつている「宮殿」と呼ばれる造作物が収められています。宮殿は社殿を表現しており、このような形は鎌倉時代後期以降に主流となったようです。県内では丹生都比売神社の社殿が嘉元三年（1305）に造り替えられた時に造作した宮殿が知られています。

こちらの本殿内部に据えられる宮殿は小さく、簡素な形態を示していますが、屋根は入母屋造という社寺などの格式が高い建物で見られる形式で軒先も反りが付き、細かな部分も表現しています。

本殿と同時期の昭和49年に県の附指定とされた貴重な文化財ですが、普段は本殿の内陣に納められている為、人の目にふれることはありません。本殿修理の間、仮殿へ御神体がお移りの間に調査させていただくことができました。



正面図



宮殿全景

（大給友樹）

きのくに歴史小話

～きのくににれきしこぼなし～

埋蔵文化財課 吉原遺跡から出土した汽車茶瓶

前頁から引き続き、令和2年度の吉原遺跡発掘調査成果から、現代のごみ穴で、面白いものが出土したのでご紹介します。

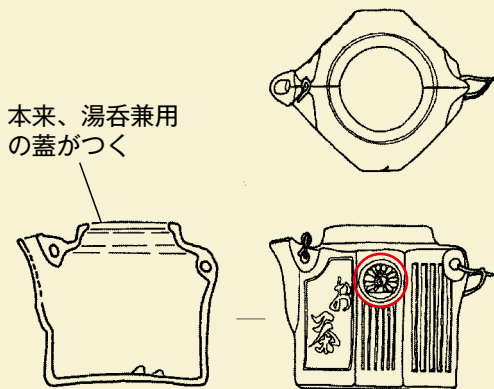
現在、お茶はペットボトルに入ったものを購入することが多いですが、明治時代以降、駅弁とともに購入したお茶は汽車茶瓶と呼ばれる陶器やガラスの容器で販売されていました。

今回見つかった汽車茶瓶は、昭和20～30年代に泥漿（たいじょう）成形により製造されたもので、側面に「お茶」の文字と「国鉄機関車動輪」のマークが刻印されています（泥漿（粘土）成形とは、泥漿（粘土）を水に溶いたものを石膏型に流し込んで成形する方法です）。蒸気機関車の車輪である動輪（スポーク）をかたどったもので、明治42年に制定されて以降、国鉄（日本国有鉄道の略称。JRグループの前身。）のシンボルマークとして使われました。

旅の思い出に持ち帰り、時が経ち、捨てられたものだと思われれます。当時の列車の旅が思い起こされる出土遺物です。

昭和30年頃からはポリエステル容器に入れて販売するようになりました。各云々筆者は、子供の頃にポリエステル容器の茶を飲んだ記憶があります。プラスチック臭がして微妙な味でしたが。

（田之上裕子）



吉原遺跡で見つかった汽車茶瓶と動輪マーク（赤丸部分）

本来、湯呑兼用の蓋がつく

催し物案内 和歌山県内の文化財関係イベント情報（2021年冬～2022年春）

和歌山県立紀伊風土記の丘

- 冬期企画展「紀北の古墳群～その実像に迫る～」
2022年1月15日（土）～2022年2月27日（日）
- 春期企画展「古代『紀伊国』の成り立ち～奈良・平安時代のわかやま～」
2022年3月19日（土・祝）～2022年5月8日（日）

和歌山県立博物館

- 企画展「仏像は地域とともに一みんなで守る文化財―」
2022年1月29日（土）～2022年3月6日（日）

和歌山市立博物館

- 企画展「歴史を語る道具たち」
2022年1月12日（水）～2022年2月27日（日）

高野山霊宝館

- 令和3年度平常展「密教の美術」
2021年12月4日（土）～2022年4月10日（日）

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、期間変更や中止となる可能性があります。
掲載内容は変更される可能性があります。詳細は各施設へお問い合わせください。

目次

- 1 表紙「木ノ本八幡神社本殿（上：屋根工事の竣工状況、下：本殿の正面）」
- 2 特集「木ノ本八幡神社本殿の保存修理工事」
- 6 埋蔵文化財課 短信「吉原遺跡周辺の自然災害」
- 7 きのくに歴史小話「細部を見つめる～木ノ本八幡神社の宮殿」
「吉原遺跡から出土した汽車茶瓶」
- 8 催し物案内

風車96（2021・秋号）

令和3年11月30日

(公財)和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp/>

(公財)和歌山県文化財センター

【事務局】 〒640-8301 和歌山市岩橋1263番地の1
TEL 073-472-3710 FAX 073-474-2270
kanri-2@wabunse.or.jp



LINE公式アカウント

ID : @942tjyhk

